

MONDAY
11
September

11 September 2017 JIJI News Bulletin

S P O R T S



株式会社 時事通信社
104-8178
東京都中央区銀座 5-15-8

(購読・契約について)
E-mail: jijiweb@jiji.com
(記事・内容について)
E-mail: edit21@jiji.co.jp

JIJI News Bulletin
時事速報
S P O R T S

陸上 2

桐生、9秒98の快挙

日本勢初、10秒の壁突破—陸上100メートル.....2

| | |
|--|---|
| 天性の「高速ピッチ」=桐生、ストライド広げ進化 - 陸上..... | 2 |
| 「ジェット桐生」、恩師に感謝=二人三脚でつかんだ栄光 - 日本学生対校陸上... | 3 |

プロ野球 4

| | |
|--|---|
| 広島、ソフトバンクともに9連勝 - プロ野球試合結果(10日)..... | 4 |
| 新人源田、鮮やか決勝打=守備のミス取り返す - プロ野球・西武..... | 4 |
| 鳥谷が2000安打=史上50人目、連続出場を更新中 - プロ野球・阪神..... | 5 |

大相撲 5

| | |
|-------------------------------------|---|
| 日馬富士が白星発進 = 大相撲秋場所..... | 5 |
| 鋭い投げで好発進 = 集中力見せた日馬富士 - 大相撲秋場所..... | 5 |

大リーグ 6

| | |
|-----------------------------------|---|
| 青木、12試合連続安打=イチローは無安打 - 米大リーグ..... | 6 |
| ダル、最速1000奪三振..... | 6 |

サッカー 7

| | |
|---------------------------------|---|
| 川崎が快勝、2位浮上=J1..... | 7 |
| 女性が主審務める=欧州主要リーグで初 - 独サッカー..... | 7 |

バレーボール 7

| | |
|------------------------------------|---|
| 日本、王者中国に屈す=通算2勝3敗で5位 - WGCバレー..... | 7 |
|------------------------------------|---|

ラグビー 8

| | |
|--|---|
| サントリーが開幕4連勝=パナソニックも無傷 - ラグビー・トップリーグ..... | 8 |
|--|---|

ゴルフ 8

| | |
|---|---|
| 片山が初代王者に=単独5位の31勝目 - ハンダ・マッチプレーゴルフ..... | 8 |
| 李知姫が大会初制覇=鈴木愛は7位 - 日本女子プロゴルフ..... | 9 |

テニス 10

| | |
|---------------------------------------|----|
| ナダル、4年ぶり優勝=アンダーソンに完勝 - 全米テニス..... | 10 |
| スティーブンスが初優勝=キーズをストレートで破る - 全米テニス..... | 10 |
| 上地が2度目優勝=全米テニス・車いす部門..... | 10 |
| 堀江、清水組は準優勝=全米テニス・ジュニア..... | 11 |

高校野球 11

| | |
|-----------------------------------|----|
| 日本は3位=3位決定戦でカナダに快勝 - 野球U18W杯..... | 11 |
|-----------------------------------|----|

ウインター・スポーツ 11

格闘技 12

陸上

桐生、9秒98の快挙=日本勢初、10秒の壁突破 - 陸上100メートル

福井市の福井運動公園陸上競技場で9日行われた陸上競技の日本学生対校選手権男子100メートル決勝で、桐生祥秀(21)=東洋大=が日本選手で初めて10秒の壁を破る9秒98(追い風1.8メートル)の日本新記録を樹立した。従来の日本記録は1998年12月のバンコク・アジア大会で伊東浩司がマークした10秒00で、19年ぶりに更新した。

68年にジム・ハインズ(米国)が史上初の9秒台をマークして以来、10秒の壁を破った選手は120人以上いるが、ほとんどが北中米やアフリカの黒人選手。アジア勢ではアフリカ出身でカタールに国籍を変更した2人と、2015年に9秒99を出した蘇炳添(中国)の計3人がこれまでに9秒台を記録している。

世界記録はウサイン・ボルト(ジャマイカ)が09年にマークした9秒58。日本陸上界にとって9秒台は長年の夢だった。

桐生は昨年のリオデジャネイロ五輪男子400メートルリレーで銀メダル、今年8月のロンドン世界選手権同種目で銅メダルを獲得。京都・洛南高3年時の13年4月に広島市で行われた織田記念で日本歴代2位の10秒01を記録して全国的な注目を集めた。15年3月に米国で行われたテキサス・リレーでは3.3メートルの追い風参考記録ながら9秒87をマーク。昨年6月に自身2度目の10秒01、今年には10秒04を2度記録し、9秒台到達へ期待が高まっていた。



男子100メートル決勝、力走する桐生祥秀=9日、福井運動公園陸上競技場

桐生祥秀の略歴

桐生 祥秀(きりゅう・よしひで)滋賀・彦根南中から京都・洛南高に進み、13年4月の織田幹雄記念国際男子100メートルで日本歴代2位(当時)の10秒01をマーク。初出場した同年の世界選手権は予選敗退したが、400メートルリレーで第1走者を務め6位。東洋大に進学した14年に日本選手権初優勝。同年の世界ジュニア選手権で日本人初の銅メダル、400メートルリレーでは2位。15年3月に米国で行われたテキサス・リレーで3.3メートルの追い風参考記録ながら9秒87で優勝。同年5月、右太もも裏に肉離れを起こし世界選手権を断念。16年6月、自己ベストタイの10秒01を記録。同年のリオデジャネイロ五輪は100メートルで準決勝進出を逃したが、400メートルリレーで第3走者を務め銀メダル。17年8月の世界選手権は個人種目で代表入りできず、400メートルリレーで第3走者を務め銅メダルを獲得した。176センチ、70キロ。21歳。滋賀県出身。

天性の「高速ピッチ」=桐生、ストライド広げ進化-陸上

桐生の強みは、足が地面に接する「接地時間」が短く回転の速いピッチ。日本陸連のデータによると、桐生が10秒01で走った2013年の織田記念では1秒当たり5.00歩だった。これは世界歴代2位の9秒69のタイムを持つタイソン・ゲイ(米国)や、9秒72のアサファ・パウエル(ジャマイカ)の4.88歩を上回る。

1984年ロサンゼルス五輪代表で元日本記録保持者の不破弘樹さんは、桐生の走りについて「足を着いた瞬間に反対側も出てくる」と指摘。「ピッチの速さはトレーニングでなかなか得られない。天性のもの」と素質の高さを強調する。

東洋大で指導する96年アトランタ、04年シドニー両五輪短距離代表の土江寛裕コーチは、桐生のピッチ数が限界に近いと判断し、入学時からストライドを伸ばすことを重視してきた。100メートルを50歩で走る場合、ストライドを1歩当たり2センチ伸ばすことができれば、単純計算では以前より1メートル前に出られる。これはトップ選手なら0秒1の短縮を意味する。土江コーチは「10秒01の選手が0秒1縮めれば9秒91。スプリンターにとって1、2センチはとても大きな数字」と説明する。

ストライドを伸ばそうと、股関節の柔軟性を高めるトレーニングや、体の縦の軸をつくって重心移動する感覚を磨けるスキップの練習に時間をかけてきた。昨季終了後からはハンマー投げ五輪金メダリストの室伏広治さんに師事し、ハンマーをぶら下げ、負荷に耐えながらシャフトを上げるメニューなどでバランスを鍛えた。土江コーチは「全身がうまく使えるようになった。キックの幅が大きくなっている」と手応えを口に、「(9秒台は)もう出る。出すかどうか、という問題は過ぎている状態」と自信を示していた。長所である足の回転の速さにストライドの伸びを加え、進化した21歳が歴史的な一歩を刻んだ。

桐生、最高時速は42キロ=9秒98の走り进行分析 - 日本陸連

日本陸連は10日、福井市で9日に行われた日本学生対校選手権男子100メートル決勝で桐生祥秀(東洋大)が9秒98の日本新記録を樹立した際の分析データを発表した。タイムを決める最大の要因とされる最高スピードは秒速11.67メートル(時速約42キロ)に達し、陸連科学委員会が9秒台の条件の一つと考える基準をクリアした。

日本学生陸上競技連合が提供した情報に基づき、陸連科学委が分析。それによると、桐生の最高スピードは10秒23で予選敗退に終わった昨年のリオデジャネイロ五輪(秒速11.20メートル)や、10秒04だった今年4月の織田記念(秒速11.42メートル)を大きく上回った。最高値の到達点は65メートル地点。分析を行った過去3大会は55メートル地点で、今回はよりゴールに近い位置になった。日本人選手は通常、60メートルまでに最高値になるケースが多い。

ピッチは1秒当たり5歩前後を中盤まで維持。歩数は47.3歩で、過去3大会よりも1歩近く少ない。一方、ストライドは後半に2メートル40センチに迫る水準に達した。1.8メートルと強い追い風の後押しもあったとみられるが、いつもより「2、3センチ大きい」(東洋大の土江寛裕コーチ)様子がうかがえる。これについて桐生は「250メートルや300メートルの長い距離を練習で走って、勝手にストライドが上がったのもある」と話した。

「ジェット桐生」、恩師に感謝=二人三脚でつかんだ栄光 - 日本学生対校陸上

少年時代にそのスピードから、「ジェット桐生」の異名を取った。その名が一躍知れ渡ったのが、京都・洛南高3年だった2013年4月。広島市で行われた織田幹雄記念国際で、自己ベストを0秒18更新する日本歴代2位(当時)の10秒01をマークした。

17歳が打ち立てた記録は陸上界に衝撃を与え、「次は9秒台」との期待が高まった。現在、桐生の練習に付き添う後藤勤トレーナーは「お尻とか太ももの筋肉の盛り上がり。当時からトップアスリートの脚をしていた」と振り返る。

早熟で天才肌の印象を受けるが、本人に言わせると「不器用」。新しい練習ではコーチに求められる動きがなかなかできないタイプだという。ただ、「時間がかかるけど、一生懸命やることができるようになったら忘れない。そこは強み」。努力で世界との差を詰めてきた自負がある。

14年に東洋大に入学し、五輪出場経験のある土江寛裕コーチとの二人三脚が始まった。苦手のスタートを克服したり、ストライドを伸ばそうと取り組んだり。試行錯誤の中で「土江先生とうまくいかない時も、しゃべらない時もあった。タメ口でキレたこともある」と振り返るが、「(17歳で)タイムが出てから、怒ってくれる人があまりいなかった」。正面から向き合ってくれた恩師への感謝の言葉を口にす。

「彼はとんでもなく集中できるタイプ。近寄れない空気がある」とスプリンターとしての迫力を口にしていた土江コーチにとっても、なかなか自己記録更新に導けなかつただけに、感無量の大記録となった。「9秒台を最初に出したい気持ちは本人も私もあった。出せてよかった」。9秒台を刻んだ9月9日は、師弟にとって忘れられない日になった。

プロ野球

広島、ソフトバンクともに9連勝 - プロ野球試合結果(10日)

<セ>

ヤクルト 1 - 6 巨人 (東京ドーム)
 広島 4 - 3 中日 (ナゴヤドーム)
 DeNA 6 - 7 阪神 (甲子園)

<パ>

オリックス 1 - 2 楽天 (コボパーク宮城)
 ソフトバンク 6 - 3 ロッテ (ゾゾマリン)
 日本ハム 7 - 8 西武 (メットライフ)

チーム成績表 (10日現在)

セ・リーグ

| | 試合 | 勝数 | 敗数 | 引分 | 勝率 | 差 | 残 |
|--------|-----|----|----|----|-------|------|----|
| (1)広島 | 131 | 81 | 46 | 4 | .638 | M5 | 12 |
| (2)阪神 | 127 | 71 | 55 | 1 | .563 | 9.5 | 16 |
| (3)DeN | 127 | 63 | 60 | 4 | .5121 | 6.5 | 16 |
| (4)巨人 | 126 | 64 | 61 | 1 | .5120 | 0.0 | 17 |
| (5)中日 | 128 | 52 | 71 | 5 | .423 | 11.0 | 15 |
| (6)ヤクル | 129 | 42 | 85 | 2 | .331 | 12.0 | 14 |

パ・リーグ

| | 試合 | 勝数 | 敗数 | 引分 | 勝率 | 差 | 残 |
|--------|-----|----|----|----|------|------|----|
| (1)ソフト | 127 | 87 | 40 | 0 | .685 | M5 | 16 |
| (2)西武 | 127 | 71 | 53 | 3 | .573 | 14.5 | 16 |
| (3)楽天 | 120 | 67 | 51 | 2 | .568 | 1.0 | 23 |
| (4)オリッ | 123 | 57 | 65 | 1 | .467 | 12.0 | 20 |
| (5)日ハム | 122 | 47 | 75 | 0 | .385 | 10.0 | 21 |
| (6)ロッテ | 125 | 42 | 82 | 1 | .339 | 6.0 | 18 |

データ協力 NPB・BIS

CSナンバー(10日現在)

【セ・リーグ】

広島、阪神8、DeNA15、巨人15、中日、ヤクルト×

【パ・リーグ】

ソフトバンク、西武5、楽天10、オリックス、日本ハム、ロッテ×

進出確定、自力進出なし、×進出なし

(協力=NTTデータ数理システム)

新人源田、鮮やか決勝打=守備のミス取り返す - プロ野球・西武

西武の新人、源田の一振りが乱打戦を締めくくった。7-7の六回に先頭の中村が四球を選び、炭谷の送りバントで1死二塁。「先輩方がチャンスをつくってくれた。思い切って振っていこうと思った」。マウンド上がったばかりの左腕・宮西の初球、高めの直球を鮮やかに右前に運んだ。

五回を終わり7-2と大きくリードしていた西武だが、六回に1点を返され、なおも1死一、二塁で源田は遊ゴロを後ろにそらすタイムリーエラー。チームは流れを失い、あっという間にこの回5失点。「僕のせいで追い付かれた」。守備のミスを取り返そうと必死で臨んだ打席だった。

源田は今季、遊撃でフルイニング出場を継続中。盗塁でリーグトップを争う俊足に加え、守備力にも定評がある。それだけに、お立ち台では笑顔を見せるどころか「こういう展開にしまって申し訳ない」と勝って反省を忘れなかった。



6回、勝ち越し適時打を放つ西武の源田=10日、メットライフ

今後は上位を争う楽天2連戦、ソフトバンク3連戦と続く。クライマックスシリーズでの戦いを見据えての終盤戦。ルーキーはもう一暴れをもくろんでいる。

鳥谷が2000安打=史上50人目、連続出場を更新中 - プロ野球・阪神

阪神の鳥谷敬内野手(36)が8日、甲子園球場で行われたDeNA18回戦の二回、井納から右中間二塁打を放ち、史上50人目の通算2000安打を達成した。初安打は2004年4月2日の巨人1回戦(東京ドーム)の八回に前田から放った左前打。

鳥谷は埼玉・聖望学園高から早大を経て、ドラフト自由枠で04年に阪神入団。2年目に遊撃の定位置を獲得し、今季は三塁手として出場。04年9月9日のヤクルト23回戦(甲子園)から連続で出場し、17年4月19日の中日2回戦(ナゴヤドーム)で金本知憲(阪神)の1766試合を抜いて単独2位となり、現在も更新している。

鳥谷、不屈の闘志で連続出場=選球眼生かし技術磨く

鳥谷の打撃成績で際立つのは四球の多さ。2011年から3年連続でセ・リーグ最多。選球眼を生かすための技術を磨いたことが大記録につながった。徹底的に振り込み、球をしっかりと手元まで呼び込むフォームを確立。その上で甘い球を逃さず、中堅中心にはじき返すスタイルで安打を積み上げた。

さらに多少のけがで休まない強さも光った。金本監督が現役時代に記録した歴代2位の連続試合出場1766試合を今年4月に塗り替え、現在も更新中。金本監督は「負担が大きい内野手でというのがすごい」と称賛。守備でも貢献しながらの勲章だけに価値がある。

今季はチーム事情で遊撃を譲ったが、「これで駄目ならやめるだけ」と発奮。三塁に回っても安定した成績を残している。14年オフには米大リーグ挑戦を模索し、環境の違いを考慮して断念したが、それでも「阪神で優勝」と切り替え、黙々とチームに貢献してきた。

5月の巨人戦で、顔面に死球を受けて鼻骨を骨折したが、翌日にはフェースガードを着けて出場する不屈の闘志を見せた。「球場に来たファンは年に一度だけの観戦かもしれない。プロはグラウンドに立ち続ける義務がある。そんな思いが連続出場の原動力だ。」

1999年夏に鳥谷を擁して甲子園へ出場した埼玉・聖望学園高の監督で、恩師の岡本幹成氏は「無口で無愛想と誤解されるけど、昔から派手なプレーやアピールをするタイプではない。どんな局面でもやるべきことをやるだけという信念がある」と述懐する。クールな仮面の下には、野球に懸ける情熱があふれている。

鳥谷敬の略歴

鳥谷 敬(とりにた・たかし) 埼玉・聖望学園高から早大を経て、ドラフト自由獲得枠で04年に阪神入団。遊撃手としてベストナインに6度、ゴールデングラブ賞に4度選ばれた。13年ワールド・ベースボール・クラシック(WBC)日本代表。180センチ、78キロ。右投げ左打ち。36歳。東京都出身。

大相撲

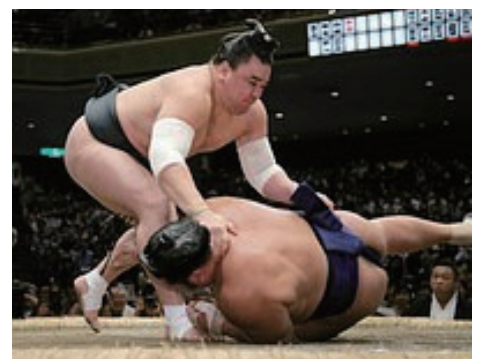
日馬富士が白星発進=大相撲秋場所

大相撲秋場所初日(10日、東京・両国国技館)

3横綱が休場した中、満員札止めでの幕開け。横綱でただ一人出場の日馬富士は小結栃煌山を上手投げで下して白星発進。幕内702勝として貴乃花を抜き歴代7位となった。大関陣は高安が栃ノ心を退けたが、ともにかど番の豪栄道は琴奨菊、照ノ富士は北勝富士に屈した。御嶽海、嘉風の両関脇も黒星スタート。

鋭い投げで好発進=集中力見せた日馬富士 - 大相撲秋場所

4横綱で秋場所初日の土俵に姿を見せたのは日馬富士のみ。そんな異例の状況で迎えた結びの一番で、33歳の横綱がさすがの集中力を見せた。



日馬富士(左)は栃煌山を上手投げで下す=10日、東京・両国国技館

当たって素早く左上手を引いた。つかんだ位置がやや深く上体が起きたが、右をのぞかせ、タイミングのいい上手投げ。「初日はいい緊張感。楽しみとドキドキがある」。相撲巧者の栃煌山を鮮やかに転がした一番を振り返り、満足そうな笑みを浮かべた。

横綱は自分一人だけという本場所は、初めての経験。御嶽海や北勝富士ら若手の台頭が目覚ましい中で、いつも以上に綱の権威を示す責任がある。八角理事長(元横綱北勝海)は「強い横綱がいて、それを倒す若手がいれば盛り上がる。そういう意味で日馬富士の負担は大きい」とみている。

いつものように両肘にサポーター、両足首はテーピングで固めての出場。体のことや特別な重圧とも闘う15日間となるが、「自分の相撲に集中する。まだまだこれから」。挑戦者の高い壁であり続けるために、まずは取りこぼしの多い序盤戦を乗り切って勢いをつける必要がある。

重責感じる高安

高安は栃ノ心を押し出して好発進。新大関で黒星を喫した先場所の初日と比べると「いい緊張感だった」そうで、「体の反応が良かった」と納得したような口ぶりだった。

兄弟子の稀勢の里ら3横綱が初日から休んだ今場所。大関としての重責は十分に感じており、「勝つことが僕の務めだから。勝つだけでなく、内容も見られるから」と力強く言った。

かど番2大関、つまずく

3横綱の休場で奮闘が求められる大関陣で、ともにかど番の豪栄道と照ノ富士がつまずいた。

豪栄道は立ち合いで左に動いた琴奨菊に対応できず、体勢を崩して押し出された。先場所もまともに当たってこなかっただけに「今場所はないだろうと(仕切りの)最後に思った」。力負けしたわけではなく「まだ14日残っているので、場所前の稽古を生かしていく」と前を向いた。

照ノ富士は北勝富士の圧力を受け、引き技にばかり。手術を受けた左膝は問題ないようで「これから頑張るだけ」と気を取り直していた。

大リーグ

青木、12試合連続安打=イチローは無安打-米大リーグ

【ニューヨーク時事】米大リーグは10日、各地で行われ、メッツの青木はレッズ戦に2番左翼で出場し、5打数1安打、1三振だった。一回の第1打席で右翼線二塁打を放ち、連続試合安打を12に伸ばした。チームは5 - 10で敗れた。

マーリンズのイチローはブレーブス戦の七回に左翼の守備で途中出場し、2打数無安打。同僚の田沢は七回1死一塁で登板し、1回3分の2を無安打無失点に抑えた。チームは延長十一回に8 - 10でサヨナラ負け。

止まらない青木

メッツの青木が好調を維持している。一回無死一塁で、一塁手の横を鋭い打球で抜き去り、12試合連続安打となる二塁打。内角に入ってきた3球目の甘いスライダーを見逃さなかった。

第3打席で放った強烈なライナーが一塁手の正面を突くなどし、この日は1安打止まり。「2、3本出てもおかしくなかったが、仕方がない」と苦笑い。それでも、チーム最年長として打線を引っ張る35歳は「いいスイングができています」と内容には納得顔だった。

ダル、最速1000奪三振

【ロサンゼルス時事】米大リーグは8日、各地で行われ、ドジャースのダルビッシュはロッキーズ戦で6三振を奪い、メジャー通算1000奪三振を記録した。128試合目での達成は史上最速。先発して4回3分の1を投げ、5安打5失点で12敗目(8勝)を喫した。チームは4 - 5で敗れて8連敗。

ダルビッシュ、今は「苦しい時期」=快記録には胸を張る

快記録達成の祝福ムードを自身の乱調で台無しにした。ドジャースのダルビッシュは、史上最速での1000奪三振を記録した直後の五回に4失点。3点のリードを守れず逆転を許し、「カウントを悪くして流れが悪くなった」と猛省した。

1死から7番アマリスタに二塁打を許すと、四球を挟んで3者連続二塁打。2番ルメイヒューに逆転二塁打を浴びた際には、本拠地にもかかわらずスタンドからブーイング。うつむきがちにマウンドを降りたダルビッシュも「苦しい時期だと捉えて、人生の勉強だなと思っている」。達観すらしたような表情で振り返った。

四回までは力強い直球を武器に1失点。C・ゴンザレスから奪ったこの日六つ目の三振で1000奪三振を記録し、「1000三振取れるまでプレーしていたことが誇れるかな」と胸を張った。

自身3連敗でチームの連敗も今季ワーストの8に伸びたが、プレーオフを見据え、投球フォーム改善の試行錯誤を繰り返す右腕は「現状の課題をクリアして、今の状況を打破する」。前向きな姿勢は失わなかった。

サッカー

川崎が快勝、2位浮上=J1

明治安田J1リーグは9日と10日、各地で第25節の9試合が行われ、前節3位の川崎は横浜Mとの上位対決に3-0で快勝し、勝ち点49で2位に浮上した。横浜Mは15戦ぶりの黒星となり、同47で2位から5位に後退。首位鹿島は大宮を1-0で下して同55とした。

柏は浦和を2-1で破り、勝ち点49で3位に上がった。C大阪はF東京を4-1で退け、同48。神戸はG大阪に2-1で競り勝った。清水は甲府に1-0、札幌は磐田に2-1で勝った。新潟と広島は0-0で引き分け。12位の仙台が9位の鳥栖に4-1で快勝した。

川崎、攻守に成果=勝負の秋へ勢い

優勝争いにとどまるためには、負けられない上位対決。川崎はリーグ最少失点の横浜Mに対し、序盤からボールを支配して攻めた。3得点の快勝に中村は「自分たちのサッカーは間違っていないという大きな自信になる」と手応えを口にした。

前半14分に相手のクリアミスで大島が決めて先制。前節は前半に先制しながら、一度は逆転を許し引き分けたが「教訓が生きた」と小林。高い位置でのプレスが効果的で、相手のミスを誘って着実に2点を加えた。

守備面でも横浜Mに自由を与えなかった。相手の得意なカウンター攻撃に対する警戒に抜かりはなく、斎藤やマルティノスがスピードに乗る前に、中盤で大島らが再三食い止めてピンチの芽を摘んだ。

6月に敵地で敗れた横浜Mに雪辱し、2位に浮上。13日にはACL準々決勝第2戦の浦和戦も控えるなど、全タイトル獲得の可能性がある。「シーズン序盤からしっかり戦ってきた結果、可能性が残っている。意識し過ぎず、一試合一試合しっかり戦いたい」と谷口。勝負の秋へ、川崎が勢いを増している。

女性が主審務める=欧州主要リーグで初-独サッカー

サッカーのドイツ1部リーグで10日に行われたヘルタ-ブレーメンで、女性のピピアナ・シュタインハウスさん(38)が主審を務め、欧州の主要リーグで女性が試合を裁く初のケースとなった。

警察官が本職のシュタインハウスさんは、2007年からドイツ2部リーグで80試合の主審を務め、12年ロンドン五輪の女子決勝などを担当した実績がある。今季から1部の試合で笛を吹くことが認められた。

試合は1-1で引き分け。無難なレフェリングを見せたシュタインハウス主審を、ブレーメンのノウリ監督は「審判にとって、性別は問題でない。問われるべきは能力であり、きょうのレフェリングはよかったと思う」とたたえた。(AFP時事)。

バレーボール

日本、王者中国に屈す=通算2勝3敗で5位-WGCバレー

バレーボール女子の世界グランドチャンピオンズカップ(WGC)は10日、名古屋市日本ガイシホールで最終戦が行われ、世界ランキング6位の日本は、既に優勝を決めていたリオデジャネイロ五輪金メダルの中国に1-3で敗れ、通算2勝3敗で5位に終わった。中国は5戦全勝。

第1セットを先取された日本は第2セット、終盤に新鍋(久光製薬)のサービスエースなどで逆転し26-24で奪った。しかし続く2セットは中国の高さに屈した。

ブラジルが米国を3 - 0で破り、3勝2敗の勝ち点11で2位となった。米国は3勝2敗の勝ち点7で3位。ロシアは韓国を3 - 0で下した。

男子のWGCは12日に同じ会場で開幕する。

奪ったセットに光明=日本、王者相手に一矢

リオデジャネイロ五輪金メダルの中国に、隙なしの強さを見せつけられて終幕。それでも、奪った第2セットには光明があった。「悔しさと、選手たちに対して本当に頑張ってくれたという気持ち」。試合後、中田監督の目から涙があふれた。

安定したサーブから、ミドルブロッカーの速攻を絡めた多彩な攻撃を展開できた。第2セットでは、中国の高いブロックに仕事をさせない場面も。「いいテンポで攻めたときには通用した」。そう話す新鍋が、20 - 23と追い込まれた場面から連続サーブエースで反撃。流れを引き寄せ、26 - 24で制した。

大会を通じて中田監督は「ファーストタッチの精度を高めないといけない」と説き、サーブとサーブレシーブをポイントに指摘していた。狙い通りのプレーができれば、世界女王とも渡り合えることを証明。「選手たちの自信につながったと思う」。セッター出身の指揮官が言い切った。

中田新体制の1年目を終え、完成度は「40%ぐらい」と言った。前進した手応えはある。メダルを逃して5位に終わった大会だが、強化の方向性は間違っていない。そう確信する収穫はあった。

ラグビー

サントリーが開幕4連勝=パナソニックも無傷-ラグビー・トップリーグ

ラグビーのトップリーグは9日、東京・秩父宮ラグビー場などで第4節の7試合が行われ、2連覇を狙うサントリーはNTTコミュニケーションズを36 - 11で下し、開幕4連勝とした。パナソニックもコカ・コーラに64 - 17で大勝して4連勝。

トヨタ自動車は東芝を23 - 18、ヤマハ発動機はリコーを35 - 12でそれぞれ破り、ともに3勝1敗。ヤマハのFB五郎丸は今季初トライを挙げた。

近鉄はキヤノンに25 - 20で勝った。クボタは豊田自動織機を27 - 19、NTTドコモはサニックスを29 - 19でそれぞれ下した。

サントリーの松井、筋力アップ実感

サントリーの新人WTB松井は、春先から取り組んできた筋力アップの成果を実感できた。前半9分に防御裏へのキックに鋭く反応しトップリーグ初トライ。その後はスピードだけでなく、相手を引きずりながらも突破する力強さも披露し、「大学時代は一発で倒されていたが、この日は耐えられる部分もあった」とうれしそうだった。

同大時代の昨年、リオデジャネイロ五輪7人制代表候補だったが、直前に落選。フィジカルの弱さが課題だった。サントリーに入ってから体重も5キロ増えた。沢木監督は「コンタクトの強さがついてきている。日本代表になれるように育てないと」。初先発で成長を示した逸材の活躍に目を細めていた。

ゴルフ

片山が初代王者に=単独5位の31勝目-ハンダ・マッチプレーゴルフ

【男子ゴルフ・ISPSハンダ・マッチプレー選手権】最終日(10日、千葉・浜野GC、7217ヤード=パー72、賞金総額2億1000万円、優勝5000万円)

決勝が行われ、44歳のベテラン片山晋呉がH・W・リユー(韓国)に3アンド2で快勝し、初代王者となった。片山は今季初勝利。通算勝利で並んでいた倉本昌弘を上回り単独5位となる31勝目。

片山は3、7番を取って2アップで迎えた16番(パー5)でイーグルを奪って勝負を決めた。3位決定戦では高山忠洋が趙炳旻(韓国)を下した。

シナリオ通りの快勝 = 44歳片山、まだまだ主役

14年ぶりに復活したマッチプレーでツアー最高額の賞金5000万円を手にしたのは44歳の片山。これまでに通算30勝の経験が見事に生きた今季初優勝だった。

片山が描いたシナリオはこうだった。「ピン位置が7日間の中で一番難しい。グリーンも速くなっている。簡単にはバーディーは取れない」。だから、作戦は自分からボギーを打ってダウンしないこと。さらに、相手のH・W・リュウが準決勝でロングパットを次々と沈めたことを聞いていた。「プロのレベルで長いのが毎日入ることは少ない」。読み通り、この日は入らなかった。

3番でリュウが5メートルを外した後に4メートルを決めて先行。7番では相手が3パットのボギーで2アップ。以後は淡々と進み、16番パー5でフェアウエーから209ヤードの第2打。「風と距離、ピン位置。5番ユーティリティーでぴったり」とピンの右1・5メートルにつけてイーグル締めで決着。宣言通り、16番まで片山にボギーはなかった。

「夏場から、新しいメンタルトレーニングをやるようになって、この年齢でも伸びる部分があると思えるようになった。秋の大会？必ず勝ちます」。44歳はまだまだツアーの中心にいる。



今季初優勝し、優勝記念のかぶとをかぶる片山晋呉 = 10日、千葉・浜野GC

李知姫が大会初制覇 = 鈴木愛は7位 - 日本女子プロゴルフ

【女子ゴルフ・日本女子プロ選手権コニカミノルタ杯】最終日(10日、岩手・安比高原GC、6640ヤード=パー71、賞金総額2億円、優勝3600万円)

首位から出た李知姫(韓国)が6バーディー、4ボギーの69で回り、通算5アンダーの279で大会初制覇。メジャー戦では2008年の日本女子オープン以来となる2勝目を飾った。ツアーは昨年9月以来の通算22勝目。

2打差の2位にイ・ミニョン(韓国)。さらに1打差の3位に東浩子が入った。川岸史果は通算1アンダーで、柏原明日架らと並び4位。連覇を狙った鈴木愛はオープンパーで7位だった。

李知姫、圧巻の連続バーディー = 集中力高めて締めくくり

終盤の17、18番で連続バーディー。鮮やかに締めくくった李知姫が、メジャー2勝目を飾った。日本ツアー18年目の38歳。「出だしのボギーで厳しいかなと思ったから、本当にうれしい」と喜びをかみしめた。

出入りの激しい最終日。16番でこの日四つ目のボギーをたたいた。「17、18番のどちらかでバーディーを取らないとプレーオフも難しいと思った」。集中力を一気に高めた。

17番パー3はピン手前3メートルに付け、単独首位を奪い返した。18番ではピン奥6メートルを沈め、派手にガッツポーズ。同じ最終組で回った東が脱帽した。「優勝経験もあるし勝負どころで逃げない。最後まですごい傾斜からしっかり沈めてくるのは、さすがだなと思った」

荒天のため、スタートが約4時間遅れた。ホテルに戻り、読書でリラックス。ベテランはアクシデントにも動じない強い精神力がある。昨年2勝したが、今季は優勝から遠ざかり、年齢的な衰えは感じたという。こ一番で日本タイトルをさらい、通算22勝目。「永久シードの30勝は遠いと思ったが、近づきたい」。闘争心に火が付いた。

鈴木「全部悪かった」

連覇を狙った鈴木はパープレーで伸ばせず、7位に終わった。前半は3バーディーを奪って2位で折り返しながら、後半の3ボギーで失速。「ショットもパットも全部悪かった。何も言うことはありません」と悔しがった。

28日から行われる国内最高峰の日本女子オープンに向けて仕切り直し。「ここまでパットが入らないと勝てない。もう少し調整したいと思う」。賞金女王を目指す23歳が気合を入れ直した。

自信になった

東浩子 ゴルフ人生ですごく自信になった。(シード権がほぼ確実となり)泣きそうです。

大きな収穫

川岸史果 後半巻き返した。(トップ5入りは)大きな収穫かな。

テニス

ナダル、4年ぶり優勝=アンダーソンに完勝 - 全米テニス

【ニューヨーク時事】テニスの全米オープン最終日は10日、ニューヨークのビリー・ジーン・キング・ナショナル・テニスセンターで行われ、男子シングルス決勝で第1シードのラファエル・ナダル(スペイン)が第28シードのケビン・アンダーソン(南アフリカ)を6-3、6-3、6-4で下し、4年ぶり3度目の優勝を果たした。四大大会通算では男子歴代2位の16勝目。優勝賞金は370万ドル(約4億円)。

ナダルは鋭いフォアハンドで主導権を握り、ネットプレーも効果的。相手のサービスゲームを計4度ブレークし、自身は一度もブレークポイントを与えない完勝だった。

女子ダブルスは(譚のツクリ)詠然(台湾)マルチナ・ヒンギス(スイス)組が初優勝した。

ナダルの略歴

ラファエル・ナダル(スペイン) 4歳でテニスを始め、01年プロ転向。05年全仏で四大大会初優勝。10年全米で四大大会全制覇を達成。特に全仏で強く、男女を通じて歴代最多の優勝10度。08年北京五輪で男子シングルス、16年リオデジャネイロ五輪では同ダブルスで金メダルを獲得。185センチ、85キログラム。31歳。スペイン・マヨルカ島出身。

スティーブンスが初優勝=キーズをストレートで破る - 全米テニス

【ニューヨーク時事】テニスの全米オープン第13日は9日、ニューヨークのビリー・ジーン・キング・ナショナル・テニスセンターで行われ、15年ぶりに米国勢同士の対戦となった女子シングルス決勝で世界ランキング83位のスローン・スティーブンスが第15シードのマディソン・キーズを6-3、6-0で破り、四大大会初優勝を遂げた。優勝賞金は370万ドル(約4億円)。ツアー通算5勝目。

混合ダブルスはマルチナ・ヒンギス(スイス)ジェーミー・マリー(英国)組が7月のウィンブルドン選手権に続いて優勝した。

スティーブンスの略歴

スローン・スティーブンス(米国) 9歳でテニスを始める。07年にプロ転向。13年に全豪オープンで4強入りするなど躍進し、同年10月21日付世界ランキングで自己最高の11位。15年シティ・オープンでツアー初優勝。170センチ、61キログラム。フロリダ州プランテーション生まれ。24歳。

上地が2度目優勝=全米テニス・車いす部門

【ニューヨーク時事】テニスの全米オープン車いす部門は10日、ニューヨークで行われ、女子シングルス決勝で第1シードの上地結衣(エイベックス)が第2シードのディーデ・デフロート(オランダ)に7-5、6-2で勝ち、2014年以来2度目の優勝を果たした。今季の四大大会は全豪オープン、全仏オープンに続いて3勝目。

上地、優勝の先見据える

勝利を決めた瞬間、上地は穏やかな笑みを浮かべた。車いす部門女子シングルスで2014年以来2度目の優勝。「素直にうれしかったのは14年だけど、今の方が先を見据えて内容的にも、気持ちの面でもいい形でできている」。ポイントを先行されても相手の動きをしっかりと見て打つ冷静な戦いぶりが光った。

ウィンブルドンからタイヤを1インチ(2.54センチ)大きくした新しい車いすを使っている。以前のものよりスピードが出る分、打点への入り方が難しいという。20年の東京パラリンピックまでにさらに改良を重ねるが、「まずは、これでいくという車いすを決めるのが直近の課題」と話した。

堀江、清水組は準優勝=全米テニス・ジュニア

【ニューヨーク時事】テニスの全米オープン・ジュニアは9日、ニューヨークで行われ、男子ダブルス決勝で堀江亨(関スポーツ塾・T)清水悠太(兵庫・西宮甲英学院高)組は第1シードの台湾と中国選手のペアに敗れ、準優勝だった。4-6、7-5からのマッチタイブレークを9-11で落とした。

日本ペア あと一步

ジュニアの男子ダブルスで日本人ペアとして初の優勝を狙った堀江、清水組は、あと一步届かなかった。1セットを取り合って10ポイントで勝敗を決めるマッチタイブレークに、8-7とリードしてから二人ともボレーのミスが出て、マッチポイントも生かせず敗れた。清水は「相手の方が勢いがあった」と悔しそうに振り返った。

優勝は逃したが、先が長い2人。堀江は「プロになっても悠太(清水)と組んで戻って来られたら」と今後を見据えた。

高校野球

日本は3位=3位決定戦でカナダに快勝-野球U18W杯

【サンダーベイ(カナダ)時事】野球のU18(18歳以下)ワールドカップ(W杯)最終日は10日、カナダのサンダーベイで行われ、3位決定戦で日本は地元カナダに8-1で快勝した。

日本は三回、清宮(東京・早稲田実)の適時打や桜井(東京・日大三)の犠飛で4点を先取。四回は安田(大阪・履正社)の適時打などで2点を加え、七、九回にも加点。先発の三浦(福岡・福岡大大濠)が7回を3安打無失点、12奪三振と好投した。

決勝では米国が韓国に8-0で圧勝し、4連覇を果たした。

ウィンター・スポーツ

LS北見、平昌五輪代表に決定=中部電力に3勝1敗-カーリング

カーリング女子の平昌五輪代表決定戦は10日、北海道北見市のアドヴィックス常呂カーリングホールで第4戦が行われ、LS北見が中部電力に9-5で勝ち、通算3勝1敗として代表に決まった。LS北見の五輪出場は初めて。

LS北見は第1エンドに3点を先取して試合を優位に進めた。不利とされる先攻の第7エンドにも2点を加え、終始リードを保った。

女子の日本は、昨年と今年の世界選手権の順位に応じて与えられる得点のランキングにより、既に6大会連続の五輪出場枠を獲得していた。

待ちに待った五輪切符=藤沢、古巣破り平昌へ

重圧から解放された瞬間。LS北見の選手たちが目を潤ませて抱き合った。ホームのリンクでつかんだ初めての五輪切符。「このメンバーで、この常呂町で戦えて幸せです」。司令塔役のスキップ藤沢が感慨に浸った。

王手をかけて迎えた第4戦。「感覚がすごくつかめていた」と振り返る藤沢が、第1エンドの最終投で正確なドローストートを決め、3点を先制した。6-3の第7エンドは不利とされる先攻でハウス内に自軍の石を集め、2点を加えて流れを決めた。

五輪2大会の出場を誇る本橋が出身地の常呂町に戻り、2010年にチームを結成して主将を務めた。その本橋が出産のために休養し、中部電力から藤沢が移籍した15年が転機。各選手に世界で戦う自覚が芽生え、活発に意見交換する機会が増えた。自立したチームに成熟し、16年は世界選手権で銀メダルに輝いた。



平昌五輪出場を決め日の丸を手に撮影に応じるLS北見の選手たち。左から藤沢、吉田知、鈴木、吉田夕、本橋=10日、北海道・アドヴィックス常呂カーリングホール

藤沢は13年、前回のソチ五輪世界最終予選の日本代表決定戦に中部電力の一員として臨み、決勝で敗れた。「一からやり直したい」。再起を決意した移籍当時の強い決意を胸に、古巣を破る巡り合わせ。「中部電力があってこそ成長できた。ここで戦えてよかった」。さすがしく言った。

平昌の晴れ舞台に立つまでの5カ月間は海外を転戦して経験を積む。「世界の強豪国と戦うためにレベルアップしていきたい」と本橋。目指すのは、日本カーリング界悲願のメダルだけだ。

LS北見のチーム小史

本橋麻里を中心に2010年8月に結成。北海道銀行を退団した吉田知那美が14年6月に移籍し、15年5月にはスキップの藤沢五月が中部電力から加入した。吉田夕梨花(知那美の妹)と鈴木夕湖はチーム結成時からのメンバーで、5人全員が北海道北見市出身。

15年11月のパシフィック・アジア選手権で初優勝。16年2月の日本選手権を初制覇し、同年3月の世界選手権で銀メダルを獲得した。LSは「ロコ・ソラーレ」の略で、ロコは「ローカル」と練習拠点とする北見市常呂町の「常呂っ子」の響きから。ソラーレはイタリア語で「太陽」を意味する。

高梨が総合6連覇=スキージャンプGP

ノルディックスキーのグランプリ(GP)ジャンプは10日、ロシアのチャイコフスキーで女子個人最終第5戦(HS102メートル、K点95メートル)が行われ、高梨沙羅(クラレ)が合計232.4点で優勝し、3連勝でGP個人総合6連覇を果たした。1回目は最長不倒の102.5メートル、2回目は101メートルを飛んだ。

勢藤優花(北海道ハイテクAC)は8位、岩淵香里(北野建設)は20位だった。(時事)

小林潤が2位=スキージャンプGP

ノルディックスキーのグランプリ(GP)ジャンプは10日、ロシアのチャイコフスキーで個人第7戦(HS102メートル、K点95メートル)が行われ、小林潤志郎(雪印メグミルク)が2位に入った。1回目だけで順位が決まり、小林潤は105メートルを飛び、118.6点だった。

小林陵侑(土屋ホーム)は15位、原田侑武(雪印メグミルク)は16位。伊藤謙司郎(同)は30位、作山憲斗(北野建設)は49位だった。(時事)

格闘技

井上尚、米初戦で圧勝=6度目防衛に成功-WBO・Sフライ級

【カーソン(米カリフォルニア州)時事】世界ボクシング機構(WBO)スーパーフライ級タイトルマッチ12回戦は9日、米カリフォルニア州カーソンで行われ、初めて米国での試合に臨んだチャンピオンの井上尚弥(大橋)が、同級7位のアントニオ・ニエベス(米国)に6回終了TKOで圧勝して6度目の防衛に成功した。

井上は5回に強烈な左ボディブローでダウンを奪うなど圧倒。6回を終え、相手が続行を断念した。井上尚は14戦全勝(12KO)、ニエベスは17勝(9KO)2敗2分け。日本のジムに所属する男子世界王者は11人で変わらない。

世界ボクシング評議会(WBC)スーパーフライ級タイトルマッチ12回戦では、チャンピオンのシーサケット・ソールンピサイ(タイ)が前王者のローマン・ゴンサレス(ニカラグア)に4回1分18秒KOで勝ち、初防衛に成功。デビューから46連勝したゴンサレスは同じ相手に連敗し、王座返り咲きはならなかった。

本場でも変わらぬ強さ=井上尚、米初戦で圧勝

初めて米国のリングに立っても、井上尚のボクシングに変わりはない。力みも無駄な緊張も感じさせず、定石通り強打を上下に打ち分ける。ニエベスの脇腹を左でえぐってパンチをつなく戦いぶりに、隙はなかった。

5回、上のパンチを見せた後、左ボディブローで膝をつかせた。6回は明らかに戦意を喪失した挑戦者に、「打ってこい」と手招きする余裕。相手陣営は次のラウンドを前に続行を諦めた。ここまでのジャッジ3人の採点は、いずれも王者にフルマークがついていた。

そんな圧勝にも、ダウンを1度奪っただけでは満足しない。現地メディアを前に「きっぱり、いい勝ち方がなかった。今後そういうボクシングを見せていきたい」と誓った。

長時間の移動を伴い、減量や調整も国内の試合とは勝手が違う。そのリスクを負っても、本場で戦いたいと思うのはボクサーの本能だろう。「環境が違う米国でも、うまくコンディションをつくれて動きも良かった」と手応えを得た。

今後について「階級を上げて行く予定」と可能性を探る。米国で、さらに注目されるビッグマッチが期待される。

井上尚弥の略歴

井上尚弥(いのうえ・なおや) 12年10月、プロデビュー。13年8月に現WBAライトフライ級王者の田口良一(ワタナベ)を破り、同級の日本タイトル獲得。14年4月に6戦目でWBC同級王座に就き、同年12月にはWBOスーパーフライ級王者となり、8戦目で2階級制覇を果たした。右ボクサーファイター。163.5センチ。24歳。神奈川県出身。